

称 号 及 び 氏 名 博士（社会福祉学） 友居 和美

学位授与の日付 2023 年 3 月 31 日

論 文 名 地域在住中高年者の死生観の醸成：死に関する対話の場の創出

論文審査委員 主 査 田垣 正晋

 副 査 児島 亜紀子

 副 査 隅田 好美

博士（社会福祉学）学位論文要旨

本研究の目的は、地域在住中高年者の死生観の実態を明らかにし、住民が自らの死生観を顕在化していくことができるよう、死について共に語り合う場を創出することである。

序章、第 1 章では、現在日本における死を取り巻く状況を概観し、死が身近な存在でない人々の死生観の形成についての研究が十分ではないことを確認した。わが国における死生観の変遷を振り返ると、日本古来の稲作に象徴される継承の意識が近代に至るまで円環的死生観として生きてきたが、今日では死生観は「空洞化」（広井，2001）していると指摘されている。このことを踏まえて現在の死生観、とりわけ死が身近にない一般地域住民の死生観に関する先行研究を概観したところ、死生観の実相に焦点化したものが多く、死生観形成についてはその重要性を指摘するに留まり形成の方策を追求した研究は乏しいことが明らかになった。

死生観の形成を考える視点として、円環的死生観が持つ継承の理念と親和性の高いジェネラティヴィティ、死について考え語るナラティブ、地域社会における死の捉え方の 3 点に着目した。第一に、ジェネラティヴィティ（Erikson et al., 1986 朝長正徳・朝長梨枝子訳 1990）は Erikson が成年中期の発達のテーマとしたもので世代的サイクルの中で人生を捉えようとする。McAdams & Aubin（1992）はジェネラティヴィティの構成を明らかにした上で、象徴的不死の欲求と他者に必要とされる欲求がジェネラティヴィティの主要な源となっているとし、それぞれをエージェンシー及びコミュニオンと表現した。日本の死生観における象徴的不死性はエージェンシーと、関係配慮的な傾向はコミュニオンとの関連が指摘できる。さらに、ジェネラティヴィティの最終段階の構成要素である「物語ること」によって人は人生に統一性や意味を付与する（McAdams & Aubin, 1992）。これは第二の視点であるナラティブに繋がる。人生の経験と密接に関連する死生観は他者との対話を通した物語のうえに形成され则认为てよいだろう。とりわけ今日各所で開催されるカフェ形式の対話の場は地域における学習共同体としての可能性を秘めている。第三の視点は、現在の日本の地域社会における死の捉え方である。地縁・血縁の希薄化に加え、死の医療化や介護の

社会化に伴って地域社会における死の存在は希薄化する一方、医療や介護、看取りの在宅への回帰が推進されていることを鑑み、エンパワメントの概念を参考にしながら地域における死の復権に着目する。

こうした観点から死について考える取り組みを概観したところ、欧米では施策レベルからコミュニティレベルまで幅広く展開されているのに対し、日本ではまだ散発的な実践に留まることが確認できた。死が身近な存在でない人が気軽に死について語る場は死生観形成の糸口になると考えられる。

第2章では、地域で死について語り合う場を創出することを目的としてプロジェクトを実施した。研究方法として、参加型で民主的な活動であり計画・行動・行動の結果の確認という循環的なプロセスを特徴とするアクションリサーチを採用し、参加対象は地域在住で死が身近な存在ではない中高年者であった。Oldenburg (1989 忠平訳 2013) の言う「サードプレイス」を参考に死について語る会を1年間にわたって開催し、場の創出と対話による死生観形成について分析を行った。その結果、場の創出に関しては、時間と空間を共有する場所(トポス)が創出された。参加者は対等で安心できる環境のもと仮想世界である死について語り、語る会への帰属意識は参加者をエンパワメントし、死すべき運命にある当事者として死を「我が事」と考える意識の涵養に貢献した。また、対話による死生観形成については、まず、語ることに焦点化した活動が個人と共同体のナラティブを生みだした。個人のナラティブは他者との外的な対話や自己との内的な対話の展開によって対話的思考が深化し、新たな意味づけや解釈が可能となり共感が波及するという変化がみられた。共同体のナラティブはゲームを利用して仮想世界の想定を可能にしたほか、前世代と次世代を意識化しつつ明るさや楽しさつまりよき状態を求めて変化した。実践の結果、各参加者は自らの世代観を担いながら独自の死生観を醸成し、死の不安感や不確実性を前にしながらも死と共に生きるために心理的幸福を追求する一方、所属集団は参加者から滲出された死生観を受けて社会的態度を形成し良き方向を目指して豊饒な変容を遂げていくという二重のダイナミズムを確認した。それは個人と共同体が相互にエンパワメントしあい、オープンエンドで循環しながら上昇してウェルビーイングを追求するしくみであった。

第3章では、死について語る会の参加者に対してプロジェクトの実施前後に個別インタビューを実施し、地域在住中高年者の死生観の構造とその変化を明らかにした。まず、13人の協力者に対して行ったインタビューの結果、各協力者固有の死生観を見い出した。さらに、全協力者の結果から McAdams & Aubin (1992) が述べるエージェンシーとコミュニオンを核とする死生観の7つの構成要素を見出し、その構成要素の配置や比重の違いが死生観に個別性を生み出すと考えられた。次に、プロジェクト参加前後の死生観の変化として、コミュニオンへの比重の移行、意味づけや視点の変化、幸福への志向が明らかになった。死生観の構造は中心核に求心的な傾向を持つエージェンシーと遠心的な傾向をもつコミュニオンを抱え、ここに対話を媒介として前世代から収斂してくるベクトルと次世代に拡散していくベクトルが存在する。この動態の中で死生観は不断に変容していく。その過程では葛藤も

生じるが、死生観の静的な構造と動的な変化の仕組みの中、最適な均衡を目指して折り合いをつけるところに人はウェルビーイングを見出すと考えられた。それは死生観の「醸成」と呼ぶにふさわしく、自らの人生の意味づけを更新し続けウェルビーイングを志向していくところに死生観醸成の意義が存すると考えられる。

第4章では、本研究全体をまとめて総合考察を行った。まず、第1節では第1章から第3章までの結果を整理した。第2節では、死について語る場の創出と死生観の構造及びその変化を総合的に考察し、死生観醸成の機序をまとめた。時空の結節点である「今ここ」にある死生観は文化や時代背景の影響に曝されていることを前提として、自由に死を語り合う場（トポス）の設定を試みた。死について語ることによって参加者は「当事者」としての意識を涵養し、死についての対話が終わらないものであることを認識した。死を語る場におけるナラティブの効果を得て対話的空間が成立し、エージェンシーとコミュニオンの均衡化によって死生観がよりジェネラティブに変化し死生観が醸成されていった。一方、日本古来の円環的死生観とジェネラティブィティの概念を参考に、前世代からの引き継ぎが現在の我々の死生観に結実し、そこから滲出する配慮を次世代へ発出していくことを確認した。こうした一連の過程において、共同体も個人もウェルビーイングを志向し、自己の感情や意思が優先されるヘドニック的幸福とより本質的なものを目指すエウダイモニア的幸福の均衡に向かっていた。

第3節では、アクションリサーチによるプロジェクトの考察を踏まえて死生観醸成の実践モデルを提示した。まず、第1段階として死について考えたいという「問題の着想」に始まり、第2段階に「場（トポス）の創出」がもたらされる。対等性や心理的安全性を確保しつつ参加者が主体的に参画し「我が事」意識を涵養できる環境を作る。第3段階として「対話の開始」が続き、次第に議論が有機的に展開するに伴って、第4段階では個人の中では自己と向き合い思索を深化させる内的対話と、他者との対話を通じて新しい発見や意味づけを生じる外的対話が展開され、対話が個人と共同体の相互的なエンパワメントを促進する第5段階に至る。その後、特定の場所（トポス）を超えて個人は納得のいく最期を目指し、共同体は思いやりのあるコミュニティを目指して、双方ともに持続的に良き状態に近づいていこうとする実践が展開される第6段階となる。この実践には終わりはなく、螺旋状にウェルビーイングを目指した追求が続いていくことが死生観醸成の実践モデルの特徴である。

最後に第4節では本研究の意義をまとめた。この時代に生きる我々は時代の問いとして死生観を必要としているという認識から出発し死生観を醸成する場を創出した。個人の死生観がウェルビーイングを志向しつつよりジェネラティブに変容し続けることによって世代性や他者を意識した死生観が醸成され、そのことがコミュニティへと伝播し豊かな死の文化の形成が期待される。我々は、死を考え語る場においてナラティブの力を借りながら過去・現在・未来を繋ぐジェネラティブィティを体現し、自己のみならず共同体としての良き未来に繋げていく。終わりのなき死生観醸成の仕組みを提案できたと考える。

本研究の限界として、対象者の属性の偏りが挙げられ、特にジェネラティヴィティの観点からの考察のためには対象を広げる必要がある。さらに、循環的なアクションリサーチの性質を踏まえれば1年間という研究期間についても検証すべきであった。今後の研究の課題としては、死について考えない人々に対する「問題の着想」の糸口を見出していくことである。今日的な状況を鑑みるに命の連鎖の先端に生きる我々は、コミュニティと個人のウェルビーイングを志向していくことが福祉のあり様だと考えるからである。

初出一覧

序章 書き下ろし

第1章 友居（2019, 2020, 2021）を大幅に加筆したものである

第2章 書き下ろし

第3章 Tomoi（2022）に基づく

第4章 書き下ろし

友居和美(2019). 地域住民に対するアンケート調査からみた希望する最期の場所と在宅死評価の二面性ホスピスケアと在宅ケア, 27(3), 236-244.

友居和美(2020). 地域住民が死を考え死生観を醸成していく過程社会問題研究, 69, 67-80.

友居 和美（2021）. 日本の死生観に関する研究知見と課題：世代継承性概念による考察
社会問題研究, 70, 81-93.

Tomoi, K. (2022). Death Attitudes among Middle-Aged and Older Adults in Japan: A Qualitative Study Based on Erikson's Theory of Generativity. *OMEGA-Journal of Death and Dying*, doi.org/10.1177/00302228221108296.

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

審査委員会は、友居和美氏からの学位申請論文「地域在住中高年者の死生観の醸成：死に関する対話の場の創出」について、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻社会福祉学分野の博士論文審査基準に基づいて厳正な審査を行った。審査委員会の開催は、2023 年 2 月 13 日、2 月 18 日、2 月 21 日である。以下の評価と結論に至った。

1. 研究テーマが絞り込まれている

本論文は、死が差し迫っていない地域在住の中高年者の死生観の実態を明らかにしながら、死生観を顕在化していくために、死を語りあう場を創ることの意義を論じている。論文全体が、この研究テーマに絞り込まれている。

2. 方法論の明確さ

本論文では、明確な理論的枠組みを設定すると同時に、複数の質的研究の手法を用いている。序章と第 1 章では、先行研究のレビューに基づき、我が国の死の文化的特徴を同定したうえで、エリクソンとマックアダムスによる世代継承性、ナラティブを、理論的枠組みとして提示している。第 2 章では、死を語る場の実践に関するアクションリサーチであり、参加者の相互作用や語りから、その死に関する意識や態度を質的に分析している。第 3 章では、アクションリサーチの参加者に対する、個別インタビュー調査を実施し、KJ 法に準拠した分析をしている。調査においては、適切な倫理的手続きがとられている。以上のように、本論文は、極めて明確な方法論に基づいている。

3. 先行研究が十分にふまえられている

論文全体における先行研究のレビューが適切になされている。序章と第 1 章では、我が国における死の社会的位置づけについて歴史的な展開と、死への準備行動や終末期ケア、死について考える取り組みといった昨今のテーマを国内外の研究をもとに検討している。理論的枠組みである世代継承性とナラティブ、および双方の理論的関連については、上述の主要論者だけではなく、それ以外の研究者の議論もふまえている。第 2 章と第 3 章においては、アクションリサーチ、個別インタビューを実施する上で、関連する研究を検討している。以上のように、先行研究が十分にふまえられていると判断できる。

4. 結論に至る論理展開が説得的である

序章から第 1 章において、死生観を操作的に定義した後、死生観の醸成が社会的に重要であるにもかかわらず、関連する研究が不足していることを提示している。また、世代継承

性とナラティブが、日本人の死生観の円環的側面等を分析することに適していること、このような死生観はナラティブで生まれることを示している。第 2 章では、死について語る場のアクションリサーチをおこない、参加者内および参加者間の対話的ナラティブ生成が、死生観につながることを提示した。第 3 章では、アクションリサーチの参加者に対する個別インタビューをしたところ、死生観には当人自身を指向するエージェンシー的側面と、他者に向かうコミュニオンの側面があり、双方はウェルビーイングに向かうことを提示した。第 4 章では、第 2 章と第 3 章の理論的考察をふまえた結論として、死を語る場における対話は、参加者個々人と共同体に影響を及ぼしていることを示した。具体的には、それぞれのエンパワメント、納得のいく最期象、思いやりのあるコミュニティの形成、最終的にはウェルビーイングにつながりうるということである。以上のように、理論的枠組みを設定して、二つの質的研究を行い、それらの知見を結論にしていることから、論理展開が説得的であると判断する。

5. 研究内容に独創性があり新しい知見を提示している

独創性は、死が差し迫ってはいない中高年の死生観に焦点をあてたこと、これを世代継承性とナラティブを分析視点に用いたことである。社会福祉学の従来の研究は、どちらかといえば、死が迫った重篤な高齢者を対象に、死の受容の促進、関連する支援のあり方を中心に論じてきたことをふまえれば、本研究の対象設定には独創性がある。また、本研究の新しい知見は、死を語る場における共同的なナラティブが、死生観を円環的に醸成するというモデルを生成したことである。円環過程においては、自らと共同体のエンパワメント、さらには、当人の納得のいく最期、思いやりのあるコミュニティを含む、ウェルビーイングが更新されていくことが提示されている。

6. 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる

前述の独創性や新しい知見は、社会福祉学全体に貢献する。第 1 に、高齢社会の一層の進展により、中高年者が、死を語り、自らの死生観を生成させることは求められるので、本研究は先駆的なものと位置づけられる。現在、厚生労働省が「人生会議」を推進しているものの、その理論的な基盤が未整備であるため、本研究は、このような取り組みの基盤になると考えられる。第 2 に、世代継承性とナラティブを関連つけた理論枠組みは、社会福祉学の質的研究の新しい展開に貢献する。特に、これまでの研究の中心は、どちらかといえば、語られた内容だったのに対して、本研究は、語ることの意味生成に注目した。死生観以外の研究テーマにも活用できるだろう。

以上の評価をふまえ、学位論文審査委員会は、本論文が博士（社会福祉学）に値すると判断した。